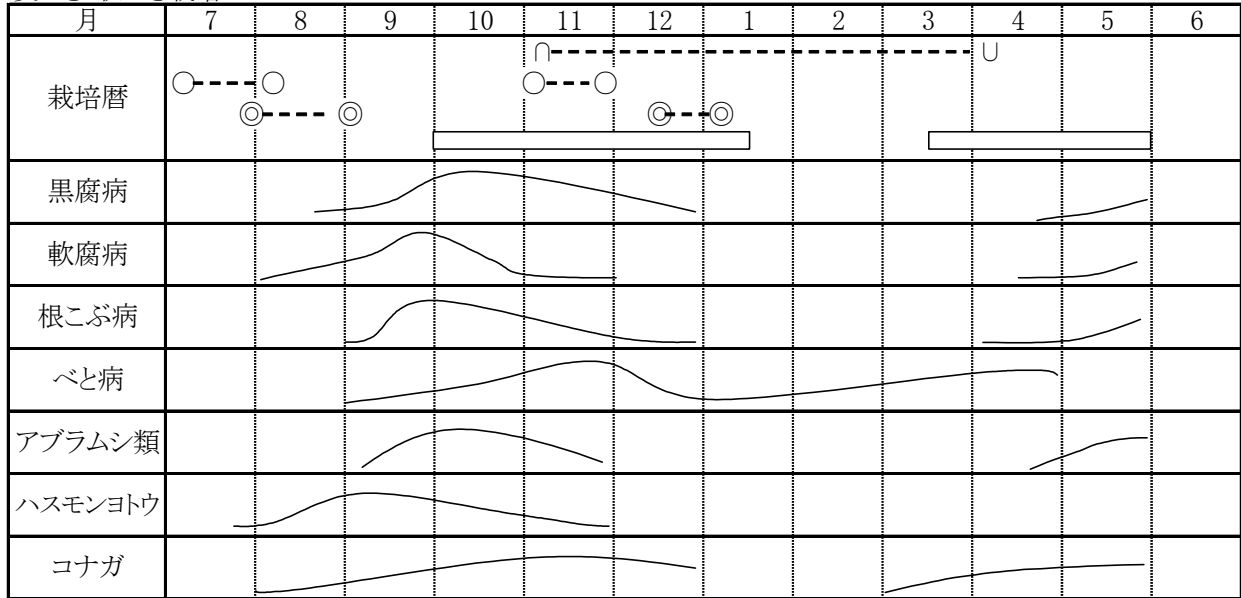


(13) カリフラワー

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

夏まき・秋まき栽培



○は種 ◎定植 □ 収穫 ∩被覆開始 U被覆終了

2 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
黒腐病 (細菌)	<ul style="list-style-type: none"> ①種子消毒を行う（野菜種子の消毒の項参照）。 ②アブラナ科作物の連作を避け、3年以上の輪作とする。 ③排水を良好にする。 ④多発したほ場では、残さをほ場外に搬出し、土中深く埋める。 ⑤常発ほ場では発病の少ない品種を栽培する。 <p>【参考事項】 傷口などから病原細菌が侵入するため、強風雨後や害虫の食害痕の多い時に発生が多くなる。土中における病原細菌の生存期間は2年程度である。防除は定植15日後～45日後までの間に3回程度予防的に行う。台風などの後には速やかに行う。無機銅を含む薬剤を散布する際は葉害軽減のため炭酸カルシウム水和剤（アプロン、クレフノン）を加用する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ①予防主体の散布をする。 (例) 銅水和剤（コサイド3000、Zボルドー） ノニルフェノールスルホン酸銅水和剤（ヨネポン水和剤）
軟腐病 (細菌)	<ul style="list-style-type: none"> ①イネ科、マメ科作物と4～5年の輪作をする。 ②定植前には除草し、裸地しておく。 ③早播きをしない。定植時の地温が20℃以上になるときはポット育苗するなど、移植時の傷を少なくする。 ④育苗期が台風の季節に当たる場合には、風当たりの強い場所は避け、強風雨時は寒冷紗をかけるなど防風対策をする。 ⑤排水を良好にする。 ⑥スプリンクラーによる灌水は朝のうちにやり、水圧を必要以上に高くしない。 ⑦発病株を早期に除去して土中深く埋める。 ⑧健全株から先に収穫するようにするとともに株の濡れているときの収穫は避ける。 ⑨収穫後の残さはできるだけ早めに抜き取り、ほ場外に搬出するか土中深く埋める。 	<ul style="list-style-type: none"> ①定植時に粒剤を土壌処理する。 (例) プロベナゾール粒剤（オリゼメート粒剤） ②予防主体の散布をする。 (例) 銅水和剤（コサイド3000、Zボルドー） 非病原性エルビニア カロトボーラ水和剤（バイオキーパー水和剤） オキシリニック酸水和剤（スターナ水和剤）

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
軟腐病 (細菌) つづき	<p>【参考事項】</p> <p>前作にイネ科、マメ科作物を植えておくと、裸地の場合より菌密度は下がる。暖秋、多雨の年に多発する。病原細菌は土壌中に残り、雑草を含む植物の根圏で生息する。降雨直後の作業は発病を助長する。秋冬穫りの栽培では早播きすると発生が多い。農薬は株の地際部を重点的に散布する。台風などの後には速やかに農薬を散布する。収穫時に切り口から感染し、出荷後に発病することがある。害虫の食痕からも侵入するので、害虫を防除することが大切である。</p>	
根こぶ病 (<i>Plasmodiophora</i>)	<p>①アブラナ科作物の連作を避ける。輪作する場合には、3年以上アブラナ科以外の作物を栽培する。</p> <p>②石灰や転炉スラグ等で土壌酸度をpH6.5以上に矯正する。</p> <p>③排水を良好にする。</p> <p>④土壌の通気を良好にする。</p> <p>⑤常発地では夏播き栽培を避ける。</p> <p>⑥農機具はよく洗うか消毒する。</p> <p>⑦発生した畑は各種野菜の苗床として用いない。また、発病ほ場又はその付近の水田土壌を各種野菜の苗床用土に用いない。</p> <p>⑧発病株は早めに抜き取って、ほ場外に搬出し適切に処分する。</p> <p>⑨前作におとり作物(抵抗性ダイコン等)を栽培し病原菌密度を下げる。</p>	<p>①土壌消毒する(土壌病害虫の防除法の項参照)。(例) タゾメット粉粒剤(バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤)</p> <p>②定植前に土壌処理又はセルトレイ灌注する。(例) アミスブルム粉剤(オラクル粉剤) アミスブルム水和剤(オラクル顆粒水和剤) フルアジナム粉剤(フロンサイド粉剤) フルスルファミド粉剤(ネビジン粉剤) フルスルファミド粉粒剤(ネビリュウ)</p>
	<p>【参考事項】</p> <p>pH6.0以下の酸性土壌で発生が多い。発病根部が土壌に残ると病原菌が広がる。低湿地で発病が多く、灌漑水によって病原菌が広く分散する。気温18~25℃の時期に発生しやすい。</p>	
べと病 (<i>Peronospora</i>)	<p>①排水を良好にする。</p> <p>②密植を避ける。</p> <p>③窒素肥料を過用しない。</p> <p>④肥料切れさせない。</p>	<p>①予防主体の散布をする。(例) 銅水和剤(Zボルドー) アミスブルム水和剤(ライメイフロアブル) TPN水和剤(ダコニール1000) ピカルプトラゾクス水和剤(ピシロックフロアブル)</p>
	<p>【参考事項】</p> <p>病原菌は各種アブラナ科作物のべと病の病原菌と同種である。</p>	
アブラムシ類	<p>①苗床では防虫ネットなどにより被覆する。</p>	<p>①育苗期後半に粒剤を処理する。(例) チアメトキサム粒剤(アクタラ粒剤5)</p> <p>②発生初期から散布する。(例) アセタミプリド水溶剤(モスピラン顆粒水溶剤) チアメトキサム水溶剤(アクタラ顆粒水溶剤) フロニカミド水和剤(ウララDF)</p>
	<p>【参考事項】</p> <p>モモアカアブラムシは主に10~6月、ダイコンアブラムシは主に4~7月、ニセダイコンアブラムシは主に9~3月に発生する。薬液は葉裏にも十分かかるようにする。</p>	
コナガ	<p>①苗床では防虫ネットなどにより被覆する。</p>	<p>①育苗期後半から定植当日にセル成型育苗トレイに灌注処理する。(例) シアントラニリプロール水和剤(ベリマークSC)</p> <p>②発生初期から散布する。 同一系統の農薬の連用は抵抗性害虫を発生させるおそれがあるので、有効薬剤をローテーションで使用する。(例) エマメクチン安息香酸塩乳剤(アフアーム乳剤) スピネトラム水和剤(ディアナSC) スピノサド水和剤(スピノエース顆粒水和剤) プロフラニリド水和剤(プロフレアSC) フルキサメタミド乳剤(グレーシア乳剤) BT水和剤(微生物農薬の項参照)</p>
	<p>【参考事項】</p> <p>発生回数が多く、春から初冬まで加害する。広範囲に処理できる条件であれば、フェロモン剤の設置により、農薬の散布回数が低減できる。</p>	
ハスモンヨトウ	<p>①苗床では防虫ネットなどにより被覆する。</p>	<p>①育苗期後半から定植当日にセル成型育苗トレイに灌注処理する。(例) シアントラニリプロール水和剤(ベリマークSC)</p> <p>②若齢幼虫のうちに散布する。(例) クロラントラニリプロール水和剤(プレバソンフロアブル5) ノバルロン乳剤(カウンター乳剤) ピリダリル水和剤(プレオフロアブル) プロフラニリド水和剤(プロフレアSC) レピメクチン乳剤(アニキ乳剤) BT水和剤(微生物農薬の項参照)</p>
	<p>【参考事項】</p> <p>通常8月中旬頃から発生する。サトイモ、ダイズなどで発生を認めたら、カリフラワーでも注意する。BT水和剤は農薬によって対象害虫が異なるのでラベルで確認する。</p>	